

「初心忘るべからず」 わが身を守る最大の知恵

商社マンが駐在と出張で学んだ海外安全の心構え



住友商事株式会社
災害・安全対策推進部 安全対策企画チーム
部長代理 酒井 雪夫

写真撮影には要注意！

1984(昭和59)年の入社以来、40年間の会社生活のうち、35年を自動車の営業畑一筋で勤めてきた。その間に4回の海外駐在と、数えきれない海外出張や休暇で70カ国を超える国々を訪ねた。

初の海外出張は1980年代後半のスーダン。当時は今のように中東の航空会社は幅を利かせておらず、中東・アフリカ地域へのお出張は欧州経由が定番で、ロンドン経由でハルツームの空港には深夜1時59分に到着。まずはトイレに駆け込んだところ、隣の個室からは、道中一緒だった同業の日本人渡航者が持参したウィスキーを処分する音が聞こえてきた。厳格なイスラム教国では、アルコールの持ち込みは禁止されている。

休日の翌日はホテル近くの市場に出かけ、珍しい魚の写真を撮っていると、突然に石が飛んで来た。後日、アフリカ中央部の某国を訪問予定だったがなんと、前の週にクーデターが発生。ところが当時の会社の海外安全管理は牧歌的なもので、特段の注意喚起もなく予定通り、近隣国に駐在する先輩と共に入国。最終日に先輩は帰任してしまったので、1人で自動車の販売店を回り、バシャバシャと外観の写真を撮っていると、いきなり武装兵士に取り囲まれた。

パスポートや名刺を見せて「自分は日本製自動車の輸出を^{なりわい}生業としていること」「現地の自

動車の販売状況を報告するために写真撮影していること」などを説明するも納得してくれない。最終的にはお抱えのタクシー運転手が一所懸命に説明してくれたので、なんとか無事に解放された。

「空港・港湾・軍事施設などの写真撮影が厳禁である」との基本は承知していたが、クーデター直後で兵士も気が立っていたのかもしれない。以後、写真撮影は必要最低限に留めている。

休暇中も各地で散々な目に

初めての駐在は西アフリカのコートジボワールのアビジャン。そこから近隣諸国15カ国をカバーし、平日は出張、土日はレポート書きの日々だったが、駐在前は書類作成と小うるさい上司と残業の多さに^{へきえき}辟易していたので心躍る毎日だった。初めての長期休暇先はイスラエルのエルサレム。当時の休暇は欧米先進国を訪問するのが一般的だったので、駐在員仲間からは「変わってるね」と言われながら出発。その聖地巡礼で遭遇したのが「インティファダ」(パレスチナ人民の一斉蜂起)。乗車していたミニバスは人の頭ほどの投石でフロントガラスが割れ、ドライバーは額から流血している。それでも手慣れた様子で、直ぐに路肩に停車すると、トランシーバーで警察に報告していた。

駐在の後半には湾岸戦争が勃発、世界中で海外出張が全面禁止となり、アビジャンでもする